



# いずみさの昔と今 第303回

「タオル誕生の功労者・里井圓次郎」

前号に引き続き、3月21日(日)まで開催の冬季企画展「タオル誕生―和泉木綿の紡いだ軌跡―」に関連して、タオル誕生に至る歴史についてお話しします。最終回となる今回は、日本におけるタオル産業の創始者・里井圓次郎についてです。

明治25(1892)年に上瓦屋の松浪米蔵により太鼓機が開発されるなど、明治20年代の泉州地域では、江戸時代以降連続と続く木綿織物業が更なる発展の時期を迎えていました。この発展途上で、新たな木綿織物であるタオルに目を付けた人物が、佐野で木綿織物業を営んでいた里井圓次郎です。

当時タオルは未だ日本に定着しておらず、高級な舶来品であり主に襟巻として用いられていましたが、明治18(1885)年、大阪で舶来雑貨商を営んでいた圓次郎の旧友新井末吉は圓次郎にタオルの製織を勧めます。そしてその製織を決意した圓次郎は、北中通村中庄に一家屋を借りて製織法の開発に励み、苦心の末、明治20(1887)年ついにタオルのパイルを作り出すためのテリーモーション

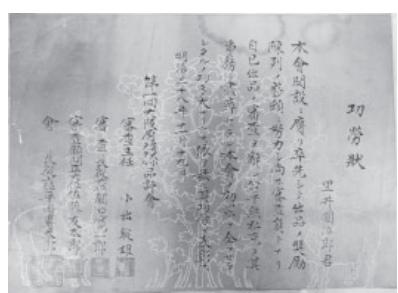
という製織法を用いたタオル製織に成功しました。この成功について、後に圓次郎は「雀躍せずにはいられませんでした」と回顧しており、その喜びの大きさがうかがえます。

さらに、圓次郎は製織法の開発を成功させただけでなく、全国に先駆けて紋タオルの製織にも挑んでいます。無紋のタオルが主流だった当時、圓次郎は紋様を施した全く新しいタオルを製織すべく京都西陣からジャカード機(紋紙を使う紋織機)を購入した上、自身も西陣へ赴いてその製織法を習得し、明治33(1900)年には紋タオルの生産を開始しました。圓次郎の製織した紋タオルには、孔雀や唐獅子といった、西陣織に通じる古典的かつ極めて繊細な意匠も施されていました。

圓次郎によるタオル製織の成功や紋タオルの開発は、当時泉佐野の地で木綿織物業を営んでいた人々に多大な影響を与え、次第にタオル業へ転業する木綿織物業者が増加します。とりわけ日露戦争(明治37(1904)年)以降(明治38(1905)年)以降タオルが国内に普及すると、動力を用いた機械式の織機である力

織機の導入と相まってタオル業者は益々増加し、泉佐野には多数のタオル工場が設立されました。こうして、泉佐野を中心とする泉南地域はタオル産業萌芽期より全国を代表するタオル産地となりました。

これらの成長と発展は、江戸時代以降泉佐野の地で培われてきた木綿織物の技術や伝統と、米蔵や圓次郎を代表とする、常に先進的な木綿製織法に挑み続けた木綿織物業者の努力なしでは成しえなかったといえるでしょう。



▲里井圓次郎功労状 (大阪タオル工業組合所蔵)

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの  
☎469-7140 Fax469-7141  
休館日 月曜日、祝日(祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館)  
開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)  
入館料 無料

## 日本遺産・中世日根荘を巡る②〇 ～旅引付編(4)「西光寺」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図」が伝えるまち―中世日根荘の風景―のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等をご紹介します。  
問合せ 文化財保護課



◀政基公旅引付  
※旅引付の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用(原本は宮内庁書陵部所蔵)



▲西光寺(大木)  
出土した軒平瓦(正面) ▼



大木にある「西光寺(さいこうじ)」は、約500年前に九条政基が日根荘での生活を綴った日記「政基公旅引付」に登場する七宝瀧寺末寺で、現在は地元団体が管理されています。

敷地には三間四方の薬師堂が残り、その中に木造薬師如来坐像と両脇侍像(府指定文化財)が安置されています。日光菩薩像の台座裏からは久安元(1145)年の墨書銘が見つかっており、藤原彫刻の定朝様の特徴を持つ、市内でも希少な仏像となっています。

また、薬師堂にかつて葺かれていた屋根瓦のうち、軒先を飾る平瓦の文様の彫られた範(型)が、政基公の仮住まいとした長福寺のお堂跡より出土した軒平瓦の範(型)と全く同じであったことが分かっており、荘園領主との深い関わりがあったことが窺われます。



▲薬師三尊像